

『ハンス=ゲオルグ・ガダマーの芸術哲学 ——哲学的解釈学における言語性の問題』

小平健太[著]、晃洋書房、2020年

[評者]
森祐亮
MORI Yusuke

0. はじめに

小平健太氏の著作『ハンス=ゲオルグ・ガダマーの芸術哲学——哲学的解釈学における言語性の問題』は、著者（以下小平氏を著者、著作を本書と表記し、本書からの引用は頁数のみを記載）が2017年に立教大学大学院に提出し、同年学位を授与された博士論文に大幅に加筆修正を加えたものである。本書はタイトルが示す通り、ガダマーの芸術についての思索を、とりわけ彼の主著である『真理と方法』を中心に明らかにしたものである。またサブタイトルの「言語性」という言葉からわかるように、本書の骨格は、芸術の真理を取り扱った『真理と方法』の第1部と、言語の問題を取り扱った第3部の橋渡しにあるといえる。『真理と方法』をはじめとしたガダマーの著作を中心に据えつつも、ガダマー思想の単なる註釈に留まらず、ヴィーコやカント、ヘーゲルといった、ガダマー研究を志す人間にとってその重要性は認識されつつも、なかなか手を伸ばすことの叶わない思想家たちの間を鮮やかに駆け巡る著者の筆致は、大変魅惑的である。いずれにせよ、本書が今後期待されるガダマー研究にとっての試金石となることは疑い得ないだろう。

本書は、管見の及ぶ限りでは、本邦5冊目のガダマーについての単著である。その中には優れた入門書や¹、政治学の視角からガダマーの思想を包括的に鋭く抉り出したもの²、プラグマティズムとの関係からガダマーの思想を読み解こうとするアメリカの研究の翻訳書³などがあるが、芸術哲学を中核に論じたものは本書が初である。

以下、本稿では1. 本書の内容と構成を大まかに素描した上で、2. 評者なりの本書に対する見解をいくつかの観点から述べ、最後に本書を読んだ上で評者に浮かんだ素朴な疑問を提示したい。

1. 本書の内容と構成

本書では、まず序論においてガダマーの哲学的解釈学の芸術思想を「美学論的観点から究明する」(3頁)という目標が告げられる。そこでは先行研究においてもガダマーの芸術思想についての研究は少なからず存在するものの、それらはガダマーの芸術思想を哲学的解釈学におけるあくまで部分的なものとして捉えているという問題点が指摘される。そしてこの指摘は同時に、本書がガダマーの芸術思想を、哲学的解釈学全体を規定するものであるという道を歩むものであるということを示すものでもある。本書の目的は「『真理と方法』における「芸術論」の扱いに張られた一面的なレッテルを乗り越え、他ならぬガダマーの芸術哲学の包括的意義を明らかにする」(7頁)ことにある。

そのために、まず第1章ではガダマーとヴィーコの関係に焦点が当てられ、そこで哲学的解釈学及び彼の芸術哲学と人文主義の結びつきが明らかにされる。従来、ガダマーの芸術哲学は師のハイデガーの影響の下で解釈されることが一般的であった。それに対して本書はヴィーコとの積極的な関係を明らかにすることで、ハイデガーの反人文主義でラディカルな形而上学批判に基づく存在論の立場とは異なる契機を、ガダマーの芸術哲学に読み取ろうとするのである。

続く第2章では、ガダマーのカント批判の意味が明らかにされる。ここでは、ガダマーの芸術哲学が単なるカント批判、近代主観主義美学批判に終始するのではなく、解釈学が美学をも包摂するという射程をもった、広大なプログラムであることが示される。本章で果たされるのは、「美学に対して解釈学が持つ本来の意義の解明」(49頁)である。

そして第3章においては、ガダマーのプラトン解釈が取り上げられる。「〈解釈学的なもの〉への解体と遡行」という村井則夫の著書『解体と遡行』⁴の影響を感じさせる副題が付された本章では、ガダマーがカントに代表される主観主義美学を批判しつつそれを包摂する形で、若い頃から一貫して研究してきたプラトンの「美」の概念に接続する様が明らかにされる。ここでは、プラトンへと接続するガダマーの意図が、言語性を媒介とする「倫理学と美学の接合」(93頁)にあったことが述べられる。

第4章では師であるハイデガーの芸術思想に、ガダマーがいかに応答したのかということが描かれる。当然のことであるが、ハイデガーのガダマーへの影響は計り知れないものがある。その中でも芸術哲学についてはハイデガーの影響がとりわけ大きく、ハイデガー自身からの評価も高かった。しかし、本書第1章で著者がすでに示してくれたように、ガダマーの思想

は決してハイデガーの焼き直しではない。本章では改めてそのことが裏付けられる。端的に述べるならば、芸術作品の真理の在り方についてガダマーの思索はハイデガー哲学を引き受けているが、精神科学に流れ込む人文主義的な言語性を重視するという点で「彼はハイデガー主義者をやめている」(159頁)のである。

最後の第5章においてはガダマーとヘーゲルの対決が、言語性を巡って扱われる。プラトン、ハイデガーと並んでガダマーに大きな影響を与えたのは本章で取り上げられるヘーゲルだろう。ここではガダマーの解釈学がヘーゲルの弁証法の図式を基本的に引き受けつつも、ヘーゲルの論理学が「知の完結性として言語の運動そのものを自らのうちにおいて体現する学であった」のに対し、「ガダマーにおいて解釈学とは……言語的経験の循環構造そのものを知の有限性として自らのうちに体現する学」(201-202頁)とされる。最終的にガダマーの哲学的解釈学は、「古代と近代、また精神諸科学と自然科学の間の媒介そのものを創出し、さらに歴史そのものをも追求する、媒介の〈媒介性〉の理論」(203頁)として提示される。

以上、駆け足ではあるが本書の内容をみてきた。本書の成果は多岐に渡り、それぞれの章がガダマーの芸術思想——あるいはそれをも包摂する「解釈学」と言った方が良いかもしれない——に新たな光を投げかけるものになっている。その上で評者の考えでは、本書の最大の貢献は、主に次の4点にあるように思われる。1.『真理と方法』における第1部芸術論と第3部言語論の整合的な解釈を示したこと、その上で2. 第一部の芸術論がたんなる導入の役割に終わるものではないことを明らかにしたこと、3. ガダマーの哲学的解釈学における人文主義の位置づけを解明したこと、4. ガダマーの解釈学における言語の位置づけを、「媒介の媒介性」として経験の領域を含みながらも、同時に独特の形でそれをメタに捉える超越論的な領野でもあることを示したことである。無論、著者が結論部で丁寧に示してくれているように、ガダマーの思想との徹底的な対決を通じて練り上げられた本書の成果はこれに尽きるものではない。また、これらの成果がそれぞれ独立にあるわけではなく、相互に密接な連関があることはいうまでもない。

本稿は本書の示す成果に意義申し立てをするものでは決してない。ただ、以下においては評者の観点から、本書の読解を通じて浮かび上がってきた観点からいくつかのことを論じてみたい。もっとも、これらは本書を読むなかで評者に改めて生じたものであり、これらに答えられていないことが本書の価値を減じるものでは決してないということを、予め明記しておく。

2. 残された論点

2.1 精神科学をめぐる人文主義と哲学的解釈学

本書で取り上げられている思想家のなかで、ヴィーコは少し特異な存在であるように思われる。ヴィーコから掘り起こした人文主義の伝統にガダマーを接続させるという点は筆者の慧眼であり、評者もまさに膝を打つ思いであった。しかし、ヴィーコは哲学史において王道の存在とはいえない。哲学の父たるプラトンは別格として、カントやヘーゲル、ハイデガーといった思想家は、いわばヴィーコの論敵であるデカルトの系譜に属する、いわば「哲学の表街道」の主人公たちと言えるように思われる。それに対して、ヴィーコが指し示す人文主義の伝統は、この哲学の表街道、すなわち認識論や存在論というまさに哲学の王道を歩む道とは少し異なる可能性を指し示すものである。それが重視するのは言語であり、ポエジーであり、あるいはアナロジーであり、修辞学である。つまり、ガダマーが『真理と方法』で「真理」に対置した「真理らしきもの」の領域である。著者も指摘するように(38頁)、ガダマーは『真理と方法』において、まずヴィーコ(及びシャフツペリ)に頻繁に言及している。本稿の見立てでは、このことで彼は王道の哲学史とは少し距離をとっているように思われる。

著者の慧眼は、このヴィーコの伝統にガダマーを接続させ、その上でそれを彼の「精神科学的真理の正当化の試み」に結びつけた点である。本書は、自然科学的な客観知に回収されない精神科学的な知のモデルが、すでにヴィーコやシャフツペリにおける人文主義によって準備されていたということを解明した。評者もこの点には全面的に同意できる。だがそのように考えた場合、果たしてヴィーコの人文主義の伝統と哲学的解釈学が擁護する精神科学の伝統は直結するのだろうか。評者はこの点は首肯しかねる。むしろ、人文主義の系譜を色濃く受け継ぐものでありながら、「精神科学」はドイツ固有の概念として独特の刻印を帯びている。いうまでもなく、このことがもっとも仔細に論じられているのは『真理と方法』の第2部である。本書では、他に比べこの第2部の扱いが少し弱い印象を受けた。また、ヴィーコとガダマーを接続させるためには、人文主義と精神科学をつなぐ、哲学の表街道から少し離れた思想家を参照する必要があるように思う。そして評者にそのキーパーソンの一人と思われるのがヘルダーである。

2.2 本書におけるヘルダーの不在、『真理と方法』におけるヘルダーの不在

ガダマーは『真理と方法』においてヘルダーについて次のように述べている。

ヘルダーこそが……人間への「ビルドゥング」⁵という新しい理想を通じて……19世紀において歴史的精神科学が展開した土壌を準備したまさにそのひとであった。当時支配的な価値を獲得したビルドゥングの概念は、18世紀のもっとも偉大な思想であり、まさにこの概念が、19世紀の精神科学が生きる契機を特徴づけているのである。(GW1: 15) ⁶

『真理と方法』における最初の「人文主義的主導概念」を扱う箇所、最初に扱われるのがこのビルドゥングについてである。そしてこの引用からも分かるように、そのビルドゥングにとって、もっとも重要な思想家として挙げられているのがヘルダーである。無論、著者もこの点はしっかり押さえている(18頁)。

評者の見立てでは、ヴィーコ的な「人文主義」の精神は、ドイツにおいてヘルダーによって独特の刻印を帯びて受け継がれている。そして、それはガダマーがその真理を擁護しようと試みた「精神科学」にも脈打っているのではないか。従って、「人文主義の伝統」を哲学的解釈学に接続させようと試みたとき、ガダマーが問題としている精神科学とはどのようなものなのかを明らかにする必要があるのではないだろうか。そしてその際に、ヘルダーの存在を無視することはできないはずである。しかし、本書においてはそのヘルダーについて論究が不十分であるように感じた。さらには、人文主義の伝統と哲学的解釈学をつなぐ肝となるのは恐らく精神科学である。そして本書にも「精神科学」という言葉は繰り返し登場するものの、その内実について十分に論じきれているとはいえない。それは先に挙げた本書の第2部に対する踏み込みの弱さとも関係しているように思われる。

だが、ヘルダーの扱いに関してはガダマー自身にも問題がないわけではない。これまで述べてきたように、本来哲学的解釈学においてヘルダーの意義は看過できるものではないはずである。それにもかかわらず、ガダマーは『真理と方法』においてヘルダーをそれほど取り上げておらず、せいぜい註で論文「ヘルダーと歴史的世界」を参照指示している程度である。その意味で、本書第1章の註13でこの論文が参照指示されていることを考

えるのであれば、むしろ本書は『真理と方法』に忠実に従っているとさえいえることができる。しかし、ここで評者は著者にあえて次のように問いたい。すなわち、「なぜガダマーは『真理と方法』においてヘルダーを主題的に取り上げなかったのだろうか」、と。本書が明らかにしてくれた人文主義と哲学的解釈学の結びつきを踏まえると、このことは一層不思議に思えるのである。

2.3 ガダマーと精神科学

本書でも繰り返し指摘されているように、ガダマーの哲学的解釈学は精神科学的な真理の正当性を擁護しようとする試みでもあった。この精神科学との関係を踏まえると、ガダマーと師であるハイデガーの違いがより際立ってくるように思われる。本書には「人文主義との関係を巡ってハイデガー主義者をやめている」(159頁)との指摘があるが、評者には、精神科学とその遺産の擁護者という点でも彼がハイデガーと決別しているように思われる。精神科学に対して「激しい軽蔑」を向けたハイデガーに対し、ガダマーは「哲学と精神科学の共通性を強調した」⁷とされる。そしてこの両者の差異は、ガダマーのこれまであまり顧みられてこなかった側面にも光を当てるものである。

精神科学の重要性を主張したガダマーの同時代人に、ヨアヒム・リッターが挙げられる。さらに彼の弟子である通称「リッター学派」のヘルマン・リュッベやオド・マルクヴァルドも、師の立場を継承している。「補償理論」と呼ばれるリッターとリッター派の立場は、ガダマー自身によって批判されていること⁸は付記する必要があるが、ガダマーと彼らの方向性に類似が認められることは明白である。

有名なダヴォス会議でガダマーの師ハイデガーの敵陣営であるカッシーラー側の書記官を勤めたリッターと、ガダマーの共通点はどこにあるのだろうか。まずは年齢である。リッターは1903年生まれであり、ガダマーの3歳年下に当たる。それは、両者とも就職の際にナチス政権との関係で苦労した経験を有することを意味しており、実際彼らの就職までのキャリアも酷似している⁹。しかし両者にとってより決定的な共通点は、彼らがまさに教養市民層そのものであったということではないか。ガダマーの父ヨハネス・ガダマーは、その名を知られた化学者であり、ブレスラウ大学の教授であった。一方のリッターの場合、彼の祖父は神学部の教授であり、父は医師であった。ガダマーの精神科学やビルドゥング、そして人文主義や伝統を重要視するという保守的な立場の淵源は、このような出自に求められるかもしれない。

以上のことを踏まえて、本書のテーゼであるガダマーは「人文主義との関係を巡ってハイデガー主義者をやめている」というところに戻りたい。確かに、本書が明らかにしたように、人文主義という岐路でガダマーとハイデガーは袂を分かたつ。しかし、実はそれはより根の深い問題であったのかもしれない。すなわち、教養市民とその文化を憎悪し、その結晶とも言える精神科学を排撃したハイデガーに対し、ガダマーは徹頭徹尾教養市民であったし、そうあり続けていた。そしてそれは彼の哲学にも少なからず影響を与えている。その意味では、ひょっとすると両者には実ははじめから相容れることのできない部分があった、といえるのかもしれない。

3. おわりに——継がれたのは誰か？

「ガダマーは人文主義との関係を巡ってハイデガー主義者をやめている」という本書のテーゼは、ガダマー研究者にとって非常に魅力的なものである。あまりにも偉大な師であるハイデガーとの差別化はガダマー自身にとって、またガダマー研究を志す人間にとって喫緊の課題であったし、今もそうであり続けているからだ。本書は、ハイデガーとは異なるガダマーの独自の魅力を、その人文主義との関係を通じて、あるいは芸術についての思索を通じて、余すことなく伝えてくれている。そのことを確認した上で、最後に次のように問いたい。果たして、ガダマーは誰の思想を継承したのだろうか。もちろんハイデガーを引き継いでいることは疑い得ないだろうし、博士論文執筆時から一貫して研究してきたプラトンの影響が大きいことも間違いない。歴史性の重視ということで彼が色濃く受け継いでいるのはヘーゲルであるし、その他本書が取り上げてきたヴィーコやカントももちろん看過できない影響を与えている。あるいは先に述べたリッターと同じ文脈で語るならば、ガダマーはカント的な内面重視の倫理学に対して、アリストテレスのエートスと慣習を重視するそれをぶつける思想家でもある。解釈学という観点からみるならば、批判的に捉えられたとはいえ、シュライアマハーやディルタイの後継者と目することも可能だろう。そこで、「ガダマーは人文主義を巡ってハイデガー主義者をやめた」というテーゼを打ち出した本書に最後に問かけたい。果たしてガダマーによって継がれたのは一体誰だったのだろうか、と¹⁰。

[注]

- 1 丸山高司『ガダマー——地平の融合』講談社、1997年。 巻田悦郎『ガダマー入門

——語りかける伝統とは何か』アルテ、2015年

- 2 加藤哲理『ハンス＝ゲオルグ・ガダマーの政治哲学——解釈学的政治理論の地平』創文社、2010年
- 3 ジョージア・ウォーンキー『ガダマーの世界——解釈学の射程』佐々木一也訳、紀伊國屋書店、2000年
- 4 村井は同書でハイデガーの解釈においてはさまざまなテキスト読解の「振れ」や「屈折」が生じていることを指摘し、同書の目的を「そのような偏向と逸脱を見定める、思考の屈折光学の試み」と規定している。本稿で取り上げる小平の著書もまた、3章に限らず全体としてこのような村井のハイデガー解釈の図式を引き受け、ガダマー解釈を行っているように思われる。Vgl. 村井則夫『解体と遊行——ハイデガーと形而上学の歴史』知泉書館、2014年、x-xi頁
- 5 本書では「教養」と訳されているBildungは、ここでは片仮名表記で「ビルドゥング」とすることにする。「教養」では必ずしもそぐわない場合もあり、また「陶冶」「教育」「(人間)形成」といった訳語もガダマーの言葉遣いに完全に沿うものではない。従ってここでは便宜的に片仮名表記を用いる。
- 6 ガダマー著作集からの引用は、GWと略記した上で巻数と頁数を付す。
- 7 三島憲一『歴史意識の断層——理性批判と批判的理性のあいだ』、岩波書店、2014年、1-17頁
- 8 Vgl. *Hermeneutik-Ästhetik-praktische Philosophie: Hans-Georg Gadamer im Gespräch*, hrsg. von Carsten Dutt, 3. Auflag, Heidelberg, 2003, S. 34ff.
- 9 ポストを得たのはガダマーが1938年、リッターは1943年であった。なお両者とも積極的なナチの支持者とはいえないが、ナチの指示表明書にはサインをしている。Vgl. Thomas Laugstien, *Philosophische Verhältnisse im deutschen Faschismus*, Hamburg, 1990, S. 30.
- 10 本稿は2021年6月27日にガダマー研究会主催のもとオンライン上で行われた本書の合評会にて発表した原稿に、加筆修正を加えたものである。司会、登壇して下さった著者を含む各先生方と参加して下さった皆様にここで謝意を表したい。